

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 71 号

2009年12月



第107回観察会・天井山自然林観察会

11月26日（日）に天井山自然林観察会を実施しました。参加者は12名でした。

今回の観察地は旧飯野町の最高峰である天井山（てんじょうやま）です。カラマツ植林地奥の登山口から、小沢沿いに開かれている山道に入ると、スギ、ヒノキの植林地がしばらく続きますが、小沢周辺にわずかに広葉樹が残っています。コナラが中心ですが、ホオノキやアカマツなども点在しています。しばらく進むと視界が開け、穏やかな広葉樹林が広がりました。下草は刈り払われているのでしょうか、林床はことのほかすっきりしています。

落葉の中にミズナラにしては大きめの葉がありました。カシワにも似ています。ナラガシワです。林床にはカシワバハグマと思しき枯れ草が2株。尾根に出ると気持ちのいい自然林が続きます。カエデやシデ類に混じってオオウラジノキやタカノツメなどが時々目に留まります。また、今年はアオハダの果実が豊作のようです。しばし足を止めて観察の輪ができました。草本類ではオケラやセンダイトウヒレンなどが処々に群落を形成していました。

尾根に出ると落葉した樹間からは霊山方面の展望が開け、一貫森のこんもりした山容が望めました。陽だまりの中、気持ちのいい自然林は、程なく途切れ、牧草地の広がる頂上に到着しました。頂上では安達太良・吾妻連峰の眺望を堪能しながら昼食をとりました。落ち葉を踏みしめての観察会でしたが、春から秋にかけて、あまたの花が楽しめそうな気配を感じさせる里山でした。



初めての天井山 山口 嵩

サルトリバラ、ナラガシワ、イチノダケ、イタヤカエデ、ヤマコウバシ、アカシデ、オオウラジオ、コハウチワ、オヤリハグマ、リョウブ、ミヤコザサ、ツルアリドウシ、ギボウシ、タカノツメ、ヤマナラシ・・・天井山登山口から山頂手前までに教わった木々や野草の名前である。

前回の中吾妻観察会に続き2回目の参加であったが、会員各位の樹木・花・コケ類についての豊富な知識に驚嘆を覚えた。事も無げな説明ただけになおさらである。数十年のキャリアを持つ会員であれば当然のことかもしれないが、それらの知識を持たない者にとっては一種のマジックを観るような感じでもあった。

登りながら自然林と人工林の相違、林床の違いによる植物分布、葉身と葉柄の長さによる同科属の識別、人工林の自然化等の解説に耳を傾けているうちに、新たな山歩きの楽しさを次第に感じてきた。

若い頃、いくつかの山に登ったが、荷物を担ぎ唯唯歩くだけ。無論それはそれで充分な達成感があったが、今考えてみると一寸もったいない過ごし方であったように思えてくる。

来年も出来る限り参加したいと思っております。足手まといになるかもしれませんが、よろしくお願い致します。



すっきりした林床



面白いものを見つけたようです

スダジイ

「シイは花の付き方がカシ類と違うらしい。それを確かめたい。間近に手で触れて確認したい。」これは4月に「宮崎県綾町の照葉樹林の観察」で得た『私の宿題』です。

宮崎からの帰りの飛行機の中で、ひとつ隣の席に座っていたツアーリーダーに感想を話す機会がありました。そのとき、帰ったらすぐにやりたいことを二つあげたのです。一つは、シイとカシ類の花の付き方を、図鑑「樹に咲く花」で確認すること。もう一つは、実際にシイの花を間近に観察すること。「…幸い福島のスダジイの花はこれからでしょうから、もう一度確かめることが…」などと、さもスダジイのありかを知っているかのように語ったのでした。そのとき、ふっと、思い出したのです。昨年、友人と杉妻会館の前の通りを歩いていたとき、クリの花の匂いがしてきました。それで私は「この匂い、クリの花の香りよ。」と得意げに言ったのはいいけれど、辺りにクリの木が見当たらずに困惑したのでした。あれはもしかすると、シイの花が匂っていたのかもしれない、とすれば、杉妻会館の裏手にシイの木があるのかもしれない。ぜひ確かめなくてはと思ったのでした。

こうして、スダジイ探しが始まりました。以前、テルサ健康クラブの帰りに、Mさんが、「スダジイ(ツブラジイ?)を知っていますか。県庁にあるのですよ。」とおっしゃった言葉を手がかりに、まず、県庁周辺に的を絞って探すことにしました。4月の末に県庁の「紅葉山公園」の樹木を丁寧に観て歩きました。が、スダジイらしきものは見つ



① スダジイの花



②天を指すシイの花

かりません。代わりに、エノキに産卵しているヒオドシチョウを観察できました。それはそれで収穫なのですが…。皮肉なものだと苦笑いしました。そこでハッと思いました。スダジイ探しは慌てなくていい、花が咲くまで待って『匂い』で探し当てれば簡単なことではないかと。

そうこうしているうちに、人づてに「スダジイは県庁公社の塀の中であって…、市役所の周りにもスダジイがいっぱいある…」とMさんが話していたと聞き、観察ポイントを市役所に移しました。そして、市役所を訪れ、ついに花芽の付いたスダジイの木を(写真①)見つけました。5月7日のこと

でした。花芽は上向きに伸びています。なるほど！昨年観察した稲荷神社のアラカシの花とは違う。アラカシの花は垂れていました…。その1週間後、花が咲いたかと期待して観に行きました。が、大きな変化はありません。いつ咲くの？いつ咲くの？毎日気になってなりません。そうして、さらに1週間後の5月20日、今日こそはと行ってみました。すると、待ちに待ったスダジイの花が開花(写真②)していました。クリーム色の細いしべだけが枝にくっついているような、まるで繊細な瓶ブラシのような花の小枝は天を指している。どれどれ、匂いは？…うん、クリの花の香りがする！さあ、こうなれば、杉妻会館前の通りで嗅いだ昨年の香りの正体を確かめることができます。

2日後、福島駅から、昨年と同じ道を歩いて杉妻会館に向かいました。すると、ほぼ同じ場所にさしかかると匂ってきました。シイの花の香りです！あの綾の大吊り橋のもとで嗅いだシイの花の香りと同じです。そのスダジイの樹は県庁西庁舎の裏手(写真③)にありました。モミジの高木などが枝葉を伸ばし、庭園の名残をとどめていますから、かつて植栽されたものなのでしょう。木の根元に立って見上げると、西側の落葉樹の高木がスダジイに覆いかぶさっているように感じます。どのくらい年数を経た木々なのか、私には分かりませんが、そこに入った感じは薄暗く湿っていて綾の照葉樹林の中と変わらないと一瞬思いました。スダジイの幹は日の光を求めて枝葉を南側に伸ばしつづけて、傾げて(写真④)しまったのでしょうか。そうして、季節には花を咲かせ、虫を呼ぶ匂いを発してきたのでしょうか。その命の継承の営みに胸をつかれました。奇しくも、その日は宮崎の綾の照葉樹林観察からちょうど1か月経っていました。

秋、シイの果実の観察に出かけました。市役所には12本のスダジイがありますが、果実を付けたの(写真⑤)は2、3本だけのようでした。県庁公社のスダジイは、見上げると幾つか果実が付いていましたが、地面はきれいに掃かれてシイの実はありません…。最後に西庁舎裏のスダジイの木の下へまわりました。そこにはたくさんの果実が落ちていました。成熟できなかつた果実の付いた枝(写真⑥)もいっぱい落ちていました。それを見ると、昨年アカラカシ観察の際に感じたのと同じせつない気持ちになりました。でも、シイの実を食べる楽しみのおまけが付いています。いつのまにか私は食欲にシイの実を拾っていました。

ブナの実はクルミの味がしますが、シイの実はクリに似た味がすることを今回知りました。このシイの実を、縄文人は生のまま食べたのでしょうか。保存はどんなふうにしたのでしょうか。シイの実のほのかな甘みを味わいつつ縄文人の生活に思いを馳せ、スダジイ観察を締めたのでした。(2009年11月10日)



③西庁舎裏のスダジイ



④南側に枝を伸ばしたスダジイ



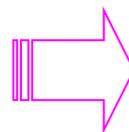
⑤スダジイの果実



⑥未熟なままの果実

訂正とお詫び

会報70号の「綾の照葉樹林」の写真に誤りがありました。以下のように訂正してお詫びいたします。



今年も早いもので年の暮れとなり、間もなく2010年を迎える。鹿狼山からは大海原がよく見えるから、元旦に初日の出を拝もうとたくさんの人が登りに来る。12月号の広報「しんち」にも山頂で大勢の人がバンザイをしている写真が載っていた。毎年2000人近くの人が山頂で、今か今かと日の出を待っていると書いてあった。新地町の人口は約8500人だから2000人というのはすごい数である。私は鹿狼山から初日の出を見たいという気持ちはあるが、あまりの混雑は避けたいので、お昼過ぎに行くのが常である。

ところで、我が家から鹿狼山はよく見えるのだが、大晦日の晩には鹿狼山の「樹海コース」沿いに明かりがずっと列になっているのが分かる。これは新地町に「鹿狼山元日登山実行委員会」というのがあって、鹿狼山の麓の杉目地区が中心になり、元日登山のお世話をしているのである。一昨年の暮れにいつものように鹿狼山に登っていたら、下からキャタピラの付いた箱形の機械が上がってきた。これにロープを付けて男性4、5人がつかまりながら歩いていた。機械に引っ張ってもらいながら登っているので、「ずいぶん楽チンしていますね。これで何をしますか」と聞いたら、「これは発電機で、元旦登山の時に、山頂や登山道沿いに灯りを付けるのだ」という答えだった。発電機は自力で登るが、灯りを竿や木に付けて行く作業は、かなり大変だろうと思われた。登山者の安全を考えてのことであろうが、年末の忙しいときに誰がやっているのだろうか。

鹿狼山には、元日だけでなく、石段には落ち葉掃きをした跡があり、雨が降った後には登山道にたまった水を抜く作業をした跡などがある。人がたくさん登るからゴミなどが落ちていてもおかしくないが、見たことがない。最近の登山者のマナーもいいのだろうが、きっと、登りながらゴミ拾いをしたり、登山者が登りやすいように掃除している人がいるのだと思う。もちろん、私もゴミが落ちていれば必ず拾うけれど……。鹿狼山は人の気遣いが感じられる山である。

先日、阿武隈山系のとある里山を登ったが、祠の中の石像がなくなっていたり、壊れたりしていた。人災ではないかと思われるふしがあった。先週の日曜日、気になって鹿狼山の石仏や祠をよくよく見たが、何ともなかったのがほっとした。風雨に晒されて、長い年月の中で自然に壊れていくのが道理である。祠も石仏も、昔の人が何か祈りを込めて置いたものであるから、大切にされなくてはならない。苔むした祠に新しい注連縄が張られていたり、お供えがあったりすると心温まる。あの山は地域の過疎化が進み、あまり世話をする人がいないということなのか。それにしても地元の人々は悲しんでいることだろう。

鹿狼山は、頂上に大きな記念碑があったり、神社も休憩所も立派だし、これ以上の建造物はいらないが、少なくとも地域の人々から守られ、大切にされていると思う。私も、来年元旦には鹿狼山に登り、良い年であるようにとお参りしてくるつもりである。(2009/12/19)



石仏の祠



祠の石仏が盗掘された



灯りがたくさん付けられる



山頂の鹿狼山神社

高山の原生林を守る会 2009 年定期総会

2009年11月29日(日) 午後13:00～15:30
福島市立子山自然の家

1. 2009年活動報告

月日	内容	参加人数
2月8日	雨乞山自然観察会	21名
4月5日	西吾妻登山道誘導ロープ補修ボランティアの米沢NFとの打合せ	4名
4月26日	浪江室原不動滝周辺・高太石山自然林観察会	16名
6月18日	西吾妻登山道合同調査、荷揚げ	4名
6月21日	西吾妻登山道誘導ロープ補修ボランティア(2コース)	8名
8月23日	達沢不動滝周辺自然林観察会	18名
10月18日	西吾妻登山道誘導ロープ補修ボランティア(ロープ取下げ)	3名
10月28日	中吾妻山紅葉観察会	18名
11月29日	総会・自然観察会(天井山)	12名

2. 会則改正

会の歴史と今後を鑑み、創立時の会則を見直し、事業、役員役割等、不足部分を加えて改正しました。

3. 2009年会計報告書(11月21日現在)

収入の部

科目	予算額	決算額
前期繰越金	110,118	110,118
会費	40,000	46,000
観察会参加費	34,500	22,200
謝金等	110,000	0
合計	294,618	178,318

平成21年度決算額
127,657円(次年度繰越金)

支出の部

科目	予算額	決算額
会議費	10,000	3,675
郵送費	30,000	25,620
観察会経費	10,000	6,966
交通費	20,000	0
保険代	35,000	0
渉外費	20,000	0
雑費	30,000	5,400
予備費	139,618	9,000
合計	294,618	50,661

3. 2010年活動計画

(1) 自然観察会

回数	実施日	場 所	テ ー マ	担 当
第108回	1月24日(日)	奥土湯	冬のフィールドサインと冬芽の観察	佐藤
第109回	3月28日(日)	御幸山	古い堂塔と広葉樹林の萌黄(もえぎ)	鈴木
第110回	5月23日(日)	裏磐梯・金山	中世の城跡と2次林の新緑	山内
ボランティア	6月20日(日)	西吾妻	米沢NFと共同の西吾妻の登山道保全ボランティア	佐藤
第111回	7月25日(日)	吾妻KO山荘	亜高山針葉樹林と湿原植物観察会	小幡
第112回	9月26日(日)	高山的場川	ブナ自然林観察会	佐藤和
第113回	11月28日(日)	立子山阿武隈東岸自然林	紅葉と登山道整備状況の観察	奥田

(2) 西吾妻登山道保全対策と山形と共同ボランティア作業について

- ◇ 3月下旬～4月上旬にNFと米沢森林管理署を加えての話し合い、主体を米沢森林管理署へ移したい。
- ◇ 6月20日のロープ掛けと、10月下旬にロープ外しの日程を決める。
- ◇ 若女平(150m)の恒久対策を検討する。
- ◇ 関東森林管理局・会津森林管理署西吾妻県境の登山道整備・水場周辺の木道設置を申し入れする
- ◇ 西大巔鞍部の保全対策については、環境省裏磐梯自然保護事務所、福島県自然保護課、会津森林管理署の3団体へ働きかける。

4. 新役員

代表 佐藤 守 事務局長 奥田 博 会計 山内幹夫 会計監査 野中俊夫
幹事 鈴木勝美、小幡仁子、佐藤和重、佐藤久美子
会報/HP 佐藤 守/鈴木勝美

会則が改正され、代表以下、新体制となりました。会則と新代表あいさつは別紙をご覧ください。

高山の原生林を守る会会則

- 第1条(名称)
この会は「高山の原生林を守る会」と称する。
- 第2条(目的)
本会は吾妻連峰高山をホームフィールドとし、県都の生活環境の一部である最も緑の豊かな吾妻連峰高山を自然破壊から守るための諸活動を行うものとする。
- 第3条(事業)
前条の目的を達成するため、この会は次の事を行う。
1. 自然観察会
2. 機関紙の発行
3. 目的達成のための諸活動
 (1) 高山をひろく理解するための諸調査
 (2) 各種資料の作成・収集(自然:地形・地質・気象・生物など)
 (3) 対外的PR活動
 (4) その他の諸活動
- 第4条(会員)
会員は、本会の趣旨に賛同する団体・並びに個人をもって組織し、性別・年齢・職業・所在地等は一切問わない。
- 第5条(役員)
本会の目的を達成するため次の役員をおく。
代表・事務局長・会計・幹事・監査
2. 代表は会を代表し、会務を統括する。
3. 事務局長は会の事務を統括する。代表に事故ある時はその職務を代行する。
4. 幹事は自然観察会及び会の運営に関する職務を分掌する。
5. 会計は会運営にかかる会計事務を行う。
6. 監査は会の会計を監査する。
7. 役員は役員会で提案し、総会で決定する。
- 第6条(顧問)
会運営の円滑化をはかるため、顧問をおくことができる。
- 第7条(事務所)
本会の事務所は代表指定地におく。
- 第8条(会議)
会議は総会と役員会とする。役員会は監査を除く役員で構成する。
2. 総会は、次の事項について審議する。議事は、出席者の過半数の賛成によって決定する。
 (1) 事業計画
 (2) 予算・決算
 (3) 規約改正
 (4) その他必要事項
3. 役員会は必要に応じて開催し、会の運営について協議する。
- 第9条(簿冊)
本会には次の帳簿を備える。
1. 会員名簿 2. 会計簿 3. 記録簿
- 第10条(運営費)
本会の運営費は年会費及び寄附金をもってあてる。
- 第11条(細則の制定)
本会則施行のため必要な細則は、会員の総意によって定める。

附 則 この会則は、平成 21 年 11 月 29 日から施行する。

新代表あいさつ 佐藤 守

このたび、代表を務めさせていただくことになりました。私は設立当初から、会計や会報編集担当として、会運営に携わってきましたが、代表の任に当たることになるとは思ってもよかったです。



「高山の原生林を守る会」は1987年設立ですので、2010年で24年目に当たります。ブナの24年はまだ幹径20cm 足らずの若木ですが、人間の世界では10年ひと昔と言われますから、ふた昔も経過したことになります。高山スキー場反対運動に始まり、森林生態系保護地域設定のために藪漕ぎをしながら、山の踏査に明け暮れた頃は、職場では自然保護の話をするだけで、変人扱いされるのが当たり前でした。労働組合に従事するのは良くて市民運動に参加する人間は煙たがられていたのです。今は、市町村、県、国を挙げて森林生態系保護や遺伝的多様性の尊重などと喧しく、まるで自然保護に携わっている人間は、これからの時代を切り開く変革者のように祭り上げられるようになりました。しかし、相変わらず森は切り開かれ、立派な舗装道路ができたり、山のとっぺんには意味不明な構造物や記念碑が建てられたりしています。私自身の感覚では、行政の自然保護に対する姿勢は24年前とほとんど変わっていないように思います。それは、法制度は整備されたようでも、肝心のそれに係る担当者がその場しのぎで、全く自然を理解していないからだとは私と考えています。

話は変わりますが、私がなぜ、長くこの会に係ってきたかについて少し説明したいと思います。私は、24年前までは社会人山岳会で登山に明け暮れる毎日を送っていました。夏は、県内の1500m以上のあちこちの山の沢登りをしました。数を重ねるうちに無意識のうちに沢にその山の現状が端的に現れると言うことを感じるようになりました。沢床や溪谷の両岸に現れるさまざまな表情でその山のあり様が理解できるのです。そんな中、異様な光景として、強く印象に残った沢がありました。帝釈山の細木沢です。沢に下りて遡行を始めると間もなく流木が目につくようになり、沢を詰めていくと水が切れ、源頭と思しきところまでたどり着いた時、その光景に息を飲みました。山の斜面全体が崩壊し、細かい礫交じりの土砂で覆われていたのです。山での樹の大量伐採が何をもたらすかを実感した思いでした。私が「高山の原生林を守る会」に積極的に参加したのはその経験があったからです。その後、高山の的場川の調査で、的場川に過去の大出水の痕跡が残されているすざましい状況を目の当たりにして、細木沢で抱いた感覚に確信を持つに至りました。登山が私の自然保護の原点であり、それは今も、これからも変わらないと思います。

スキー場問題が一段落し、会は観察会を中心に事業を展開するようになりました。当時の私は、観察会というものが良く理解できず、ついて歩く状態でしたが、回を重ねるにつれ、森や植物の表情が見えるようになり、自然生態系の仕組みや営みに対する畏敬の念が芽生えてきました。24年を経た私が感じているのは、日常的に自然に係ることでしか理解できない森の営みや価値があるのではないかと言うことです。自然保護にとって『森を知る』ことはとても重要なことです。また、森を歩いて湧き上がる自然に対する感情は、その人にしか感じられないもので、『森と人間個々人が1対1の関係にある』のだと思います。100人いれば100人の自然保護の感覚があるのであり、それがうまく編みあがった時に、大きな自然保護のうねりとなるのだと思います。知識や技術ではなく、『人間の感性』が自然保護の確かな力になるのだと思います。知識や技術は感性があって初めて活かされるものと考えています。

幸いにして、この会の観察会は100回を超えるまでになりました。県内では、このように長い間、山を中心とした自然観察会を継続している団体はないと思います。その活動は地味であり、時代の寵児となるものでもありませんが、観察会への参加を契機として森に興味を持つ人間が1人でも増えることがあれば、とても嬉しいことです。これからも積み上げてきた観察会を中心に会の事業を展開していきたいと考えます。改めて説明するまでもないと思いますが、山野草愛好会のように植物を採種して歩く、趣味の会ではありませんので、ご理解を。

最後になりますが、この会の成立は、高山スキー場建設という政策に対してはつきりとノーという姿勢をとったことが原点であることは、事実として忘れてはならないと考えます。それは、この会では社会性を持ちつつも、行政とは一定の距離感を持ち続けることの重要性を意味していると考えます。森林行政とは営業利益を共有しないアマチュアであることが、自然保護行政の進歩を実現するものと考えます。アマチュアであっても行政を動かす確かな力となるのは、森の踏査による発見の積み重ねだと考えます。観察会は踏査ではありませんが、そこで得られた発見の蓄積は大きな財産になると考えます。

会の代表として、これから何年務まるのか、不安なものがありますが、見せかけだけの自然保護の流れに対して、細いながらもしっかりした竿となればと思っております。また、培われてきたこの会独特の暖かい空気を大切にしていきたいと思っております。会員の皆さんのご協力を心からお願いさせていただきます。

(2009年12月24日)

東北ブナ紀行 (36)

奥田 博

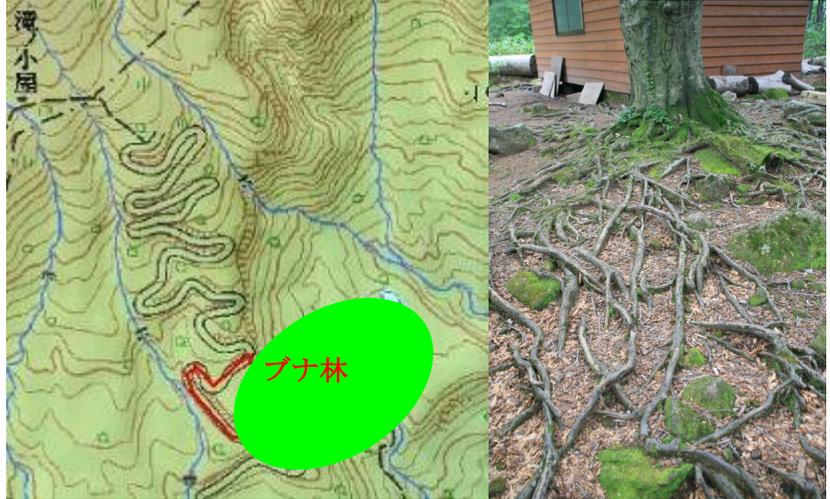
山形・秋田県境の鳥海山から丁(ひのと)山地にかけてはブナの森が多く点在している。以前に紹介した中島台と同じようにブナを見て回るコースに鶴間池がある。一方、鳥海山の更に東には怪峰甕山がある。千を切るものの、南北に雌雄を分かちように男甕と女甕が聳える。

70) 鳥海山麓 鶴間池

鳥海山への南側の登山口である滝ノ小屋へ至るジグザクな車道。その途中に見逃しそうな小さな看板「鶴間池へ」が立っている。カーブの膨らみに車を止めると、遥か下には鶴間池が見えた。

登山ではなく下山から始まる。わい性化する直前のブナ林は、そんなに太くなるわけでもなく、中肉中背のブナだが、粒の揃っている点で優れていると思う。池への下降はハシゴやロープに掴まっての急坂で始まる。太いブナがいくつか現れ、羊歯が林床を這う。やがて沢の流れが聞こえると、鶴間池に到着する。水気が多く、平らな場所はブナの好むところ。この一帯はブナが聖地に守られるような平和な場所だ。静まり返った鶴間池の畔には小さな山小屋が建っていた。見事なブナに囲まれて、一夜を過ごしたい小屋だった。

コースタイム: 登山口(10分)急坂(30分)鶴間池(30分)急坂終(30分)車道經由登山口



(写真) 鶴間池小屋の前に根を延ばすブナ

71) 甕山

山形県と秋田県の県境にそびえる特異な岩峰甕(こしき)山は近寄りがたい存在感がある。紅葉の季節に訪れたい山である。

駐車場から歩き出すとほどなく若い二次林のブナ林に囲まれた三角屋根の小屋も建つキャンプ場に入る。ここから「大カツラ」の表示に従って森の中をたどる。環境省巨木の森に指定されたカツラは実に見事だが、朽ちが激しい。

ここから男女のコルまで急坂に耐える。ブナ林の間からは女甕の岩場が見える。コルから女甕山を往復するが、山頂からは鳥海山が大きく迫っていた。

コルに戻って、秋田側の名勝沼に向かって下降する。名勝沼は静まり返っている。ここから南へ向かって県境尾根まで平坦な道をたどる。県境尾根からはブナ原生林の中を山頂へと向かう。急坂が続くが見事なブナ林が気を紛らわせてくれる。そんな中にポツカリと空を明けた空間が広がる。そこには複雑に捩れ折れ曲がったブナが倒れていた。最期に何があったかは知るよしもないが、波乱万丈な人生を思わせる姿に感動する。最近折れたブナや倒木に目が行くのは、トシのせいだろう。ブナは朽ちて肥やしとなり、大きな空間は次の世代を育む光を存分に与える。人もそんなブナの大木のようなになったらイイ。

やっとの思いで尾根にたどり着けば男甕山頂は近い。男甕山頂からは東側の展望が得られる。男甕のシンボル・鳥帽子岩が象徴的に突出している。先ほど登った女甕も目の前だった。

コースタイム: 前森山林道登山口(30分)大カツラ(30分)男女のコル(25分)女甕(20分)男女のコル(30分)名勝沼(30分)県境尾根(40分)男甕(20分)甕峠(45分)登山口



(写真) 捩れ折れ曲がったブナ

イソツツジ (*Ledum palustre* ssp. *diversipilosum* ツツジ科イソツツジ属)

火山性の礫地に形成された酸性の高層湿原に生育する低木性常緑樹。安達太良山域が南限となっている貴重種である。

葉は一見して対生のように見えるが、節間が伸長した枝についた葉を観察すると互生であることがわかる。葉形は先が尖り、細く長い。葉縁は鋸歯が無く滑らかで裏側に反り返る。革質で中央の主脈の周りに網目状の葉脈が走る。ヒメシャクナゲの葉に似ているが、葉色はヒメシャクナゲより明るい緑色。葉裏は白色の短毛が密生し赤褐色の長い毛が混じる。主脈は赤褐色の長毛が多い。変種小名は多様な毛を意味し、この2種類の毛を指す。

花は頂性で枝先に繖状の総状花序を形成する。小花は花冠が5裂し、基部まで離生するのでツツジ類に一般的な花筒はない。花色は白。葉とは反対に裂片の縁が外側に巻くように波打つ。雄しべは10個で葯は黄白色。雌しべの淡緑色の子房と黄色の柱頭が僅かに色彩感を放っている。

花が咲きそろうと明るい葉色を背景に純白の球状花が引き立ち、さわやかさを感じさせる。冬になると葉色は鈍い赤紫に変色するが、落葉することなく越冬する。大き目の花芽をてっぺんに着け、その下に細い葉を傘のように重ねた姿は人形の様でもある。その可愛い姿を見初めたのは、いつだったか、おぼろげとなってしまった。

南限とされる安達太良山で私が確認できた植生地は対照的である。沢沿いの小さな湿地にわずかに生息する一方で、尾根筋では、季節風の直撃を受ける岩礫地のマント植生に小群落を発達させていた。種小名は沼地に生育することを表しており、その植生的適応性の広さは神秘的である。その秘密を解く鍵は、エリコイド菌というツツジ類特有の菌根菌が、イソツツジの根にも着生していることにあるかもしれない。

花は短命であり、良く晴れた日に花を観察すると、ほとんどの花冠裂片は白色が退色していることが多く、瑞々しい花に出会うのは稀なように私には思える。花は独特の芳香を放ち、安らぎを感じさせるが蜜は有毒とされているので注意が必要である。



トウゴクミツバツツジ (*Rhododendron wadanum* ツツジ科ツツジ属)

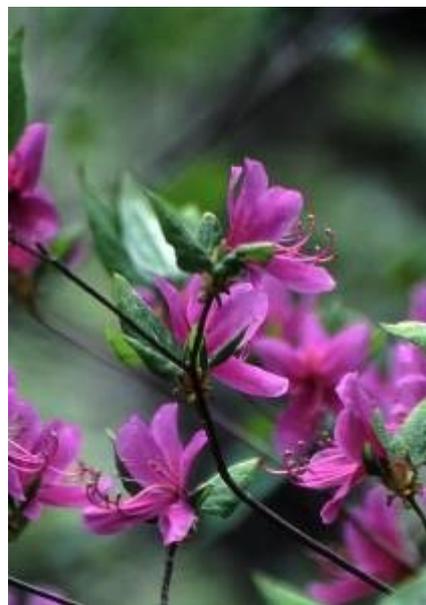
ミズナラ林からブナ林にかけて生育する落葉低木。吾妻・安達太良山系では春から初夏にかけて最も早く咲くツツジである。

葉は枝の先端に3枚の葉を輪生する。ツツジ類はヤマツツジなど5葉を基本形とするものが多い中で特異である。葉形は菱形を縦に伸ばしたような端正な形をしており、先端は尖る。葉の縁には細かい鋸歯がある。葉柄には毛が密生する。高山では、ヤマツツジと混生していることが多いが、葉が大型で形も特徴があるので容易に識別できる。枝は長枝が短枝を分岐しながら伸長するので波状となる。短枝の先端に葉芽と花芽が一緒の混合花芽を着ける。

花は頂性。花色は、蕾の時期は濃紅紫色の独特の色合いである。開花すると明るい赤桃色となる。花冠は深く5裂し、上部裂片に斑点が着生する。雄しべはムラサキヤシオ、イソツツジと同じで10個ある。ヤマツツジ、レンゲツツジは5個である。花糸は赤紫色で無毛だが花柱は有毛である。また花柄にも毛が密生する。

トウゴクミツバツツジは名が示すように関東から中部地方が分布の中心であるが、安達太良や高山のブナ林でもコロニー的に群落が形成されている。この山域のブナ林を代表するツツジであるが、意外と知られていない。花の開花期が葉の展開する前となるため、花着きのいい年のトウゴクミツバツツジは株全体が花冠群に包まれ、華やか。その色合いはほどこまでも明るく、気品を感じさせる。

実は、トウゴクミツバツツジは蕾の時期も別次元の美しさがある。トウゴクミツバツツジの花芽では発芽後、急速に花冠が生長するため、鱗片が押し上げられる。この時期、花芽が発芽してしばらくの間は蕾の頭に鱗片が付着したままである。その姿は帽子をかぶったようで、トルコの Cappadocia の奇岩の様でもある。濃紅紫色の色調は怪しく、艶やかで、とても満開期の気品のある姿を想像することはできない。



第108回自然観察会案内：奥土湯周辺の雪上観察会

日時：2010年1月24日（日）7：30～15：00

集合場所：四季の里正面入口駐車場 集合時間：7：30（福島交通・峠の原バス停7：54）バス（福島駅東口発7：25、峠の原7：54、土湯温泉着8：03）にて土湯温泉に移動します。福島駅または途中からバスに乗り乗車する方はあらかじめ申し出て下さい

参加定員：20名

内容：土湯温泉から奥土湯893m峰周辺を訪ね、動植物の様子を観察します。

準備品：昼食、冬用登山靴または防寒靴、防寒服、防寒帽子、手袋、ワカンまたはスノーシュー・山スキー、ストック、筆記用具、（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）

*その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時までお願いします）。

第109回自然観察会案内：御幸山（ごこうせん）自然林観察会

日時：2010年3月28日（日）7：30～15：00

集合場所：小鳥の森駐車場 集合時間：7：30 参加定員：20名

内容：旧月館町の秘峰を訪ね、春の芽吹き、里山の植生、温暖化の影響など観察します。

準備品：昼食、菓子等、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、手袋、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）

*その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時までお願いします）。

2010年カタクリの会奥羽自然観察会計画

月日	回数	自然観察会のテーマ	観察地
1月17日（日）	229	冬の廻戸小屋	西和賀町廻戸
2月7日（日）	230	雪の自然観察	西和賀町志賀来
3月22日（月）	231	春を見つけよう	西和賀町川舟
4月29/30日（木・金）	232	カタクリの里歩き	西和賀町貝沢・星めぐりの森
5月16日（日）	233	夏椿と夏の渡り鳥	西和賀町白木峠
6月13日（日）	234	新緑のブナの森	西和賀町未来の森
7月11日（日）	235	和賀川遊び	西和賀町貝沢・星めぐりの森
8月22日（日）	236	ブナの森の滝巡り	西和賀町下前風景林
9月12日（日）	237	秋のブナの森	西和賀町笹峠
10月17日（日）	238	落葉とキノコ	西和賀町ブナ指標林
11月7日（日）	239	冬の渡り鳥	西和賀町錦秋湖
12月5日（日）	240	初冬の森	西和賀町

- カタクリの会は西和賀町で、自然観察会開催を目的とした会です。
- 誰でも自由に参加できますが、各観察会の一ヶ月前から電話でのみ受付です。
- カタクリ通信を偶数月に発行いたしており、希望者には年間千円で送付致します。（郵便振込みをご利用ください…02350-5-38765 加人者名…カタクリの会）
- 連絡先：〒029-5512 和賀郡西和賀町川尻 41-72-15 電話 & FAX 0197(82)3601 代表：瀬川強

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第71号 2009年12月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木